

# 「豊かさとは」

京都大学名誉教授  
大阪工業大学情報科学部  
学部長 西川 一

このエネルギー科学研究科ができました当時のことを一寸ふれたいと思います。三年ほど前でありますけれども、このエネルギー科学研究科という独立研究科を京都大学に作るべく、いろいろ私もそれなりの尽力をしたわけでございます。一方、原子エネルギー研究所というのがこの宇治の構内に元々ございまして、そこの改組もしなければならぬといふので、エネルギー理工学研究所とするといふことで、その両方を車の両輪のように、教育と研究の面で交流をしながらやっているのだと、その辺をセールスポイントにして、文部省の方へ説明に参りました。当時、エネルギー科学研究科の準備室長であり、初代の研究科長をなさいました新宮先生と何度か文部省に行きまして、「エネルギー科学研究科とエネルギー理工学研究所、科学と理工学と、どう違のだ。」そういう質問が出てきたりしまして、新宮先生と、その辺以前によく説明したはずなのに、文部省がどうなっているかな、などと言いながら、今日文部省の方がいらっしゃらないと思うんですが、やっておったと言うのが、ちょうど三年前になるわけでございます。

この研究科、京都大学の将来構想として、いくつかの学部に跨るような新しい分野の大学院の独立研究科を作ろうという、そういう基本的な構想が出てまいりました。それがさらに三年前ぐらい、つまり今から六年前ぐらいだったと思います。

私は、ぜひエネルギーに関する総合的な大学院研究科を作りたい、というようなことで、非常に乱暴なスケッチをいたしまして、その時、エネルギー総合科学という名をつけていたのですが、総合はちょっとおこがましいので、途中でなくなってしまった、というような経緯もいろいろございました。

とにかく比較的早い時期にこの研究科が認可されまして、先生方がその後いろんな角度から、教育にあたっておられるわけでございまして、今年の春、関西電力さんのご配慮によりまして、新しい寄附講座が作られたといふことで、本当に嬉しい限りであります。

今日は、その開設記念の講演会、まず第一発目、なにか話をせよ、といふことで、「豊かさとは」といふ、いったい何を喋るのだらうという表題を付けてしまったわけですが、曰く因縁につきまして、後で少し触れます。お聞きになっている方々は、あいつもだいたいじいさんになっておったなあ、こんな話するなよ、という感想をお持ちではないかと思ひます。年をとったのは争えない事実でございますので、ここで、こういう立派な場で講演させていただくような内容ではないかと思ひますが、私なりの考えの一端を申し述べて、いろいろ皆様方のご批判を仰ぎたい、ご教授を仰ぎたい、そういう気持ちでございます。

後ほど、茅先生がきちんとした話をされると思いますので、その前座の一つ軽い漫談であるぐらいと思って、お聞きいただければ、幸いです。

皆様のお手元のレジメ（資料１）に沿って、大体このような話をこのような順番でしてみようと考えております。第一に、こういうことを私なりにその考えに至った動機から始まりまして、よくその心の豊かさというのは、この頃非常に言われる物の豊かさだけではどうも行き詰まるという風なことまでですね。その辺になると、全く分からないわけですが、敢えてその辺のプロローグ的なところだけちょっと申し上げまして、あと、この資料のような順番で、どこまで話が行くか分かりませんが、私が話を始めると、初期の予定と違う脱線をよくやりますので、どこまで話がこの計画通りに進むか、それは保証の限りではないですが、だいたいこういう順番で話をさせていただこうと思っております。

考察の動機としては、二つありまして（資料２）、一つは非常に一般的な話で、ここにいらっしゃる方々は何らかの意味でいろいろお考えのことでございますけれども、従来の文明、特に二十世紀文明、要するに科学技術の時代、技術革新の時代、そういう世紀であって、その結果、我々はいろいろな恩恵を被っているわけですが、また反面いろいろな問題が出ているということです。その科学技術が発達し、それに寄りかかって、効率化という道を歩んできた先進国と、それと対比的に依然貧困と人口爆発が続く途上国、その対比がますますくっきりしてきました。その辺が様々な問題の原因ではないかと思われます。効率化、利便性が増した反面、ゆとり、精神性などというものが、特に日本の社会から、最近だいぶ希薄になってきたのではないか。もっと簡単に考えて、途上国が先進国並みに発展したとしたら、エネルギー、資源、食料、環境などの点では、これは明らかに破局しかない。要するに、先進国並みの物の豊かさ、そういう物がどう見ても行き詰まりであろうと、考えざるを得ない。これは非常に一般的な話であります。ですから、私の感じといたしましては、二十世紀型の科学技術文明に依存してきた一つの症状であります。それは一種のバブル的症状だと言っても過言ではないかと思えます。文明に依存して、効率化し、その繁栄を、物質的繁栄を謳歌している、しかしその裏側で、非常に大きな負債がどんどんたまっている、と言う状況だと言っていいのではないか。しかもその負債がたまった状況を何とかしないといけないと、みんなが思っているのだけれども、なかなかそこから脱却できない。ライフスタイルを変えなければいけないとか、いろいろ言うんですけれども、そう簡単なことではない。それを実現したらいいんだろうなと思いつつながら、みんな戸惑って、悩んでいる、そういう現実に対する認識、それは誰でもそう思うわけですが。

それから、動機といたしましては、（資料３）に示しますように科学技術会議の十九号答申（１９９２年、議長 総理大臣）で、その正式な表題がちょっと違いますけれども、「ソフト系科学技術の展開に向けて」という内容の答申が出され、ここで言うソフト系科学技術、ソフトの意味は、いわゆるコンピュータのソフトウェアと言う狭い意味ではなくて、人間とか、その集団、つまり人間社会の意志を具体化したものであります。そういう

風に解釈していいかと思えますけれども、そういう答申、議論がなされました動機として、1992年ですから、少し前ですけれども、この二十世紀の終わりに近づいて、人間と科学技術の間に、どうもギャップが生じているのではないかと、乖離があるのではないかと。科学技術に対する一般の人々の疎外感という風なものが顕在化しつつある。或いは、科学技術の発展がそのまま人間の豊かさとか、幸福につながるのかどうか、ということについて、クエスチョンが出されている。そういうことから始まりまして、効率性のほかに、人間やその集団の特性の理解に基づいて、ある意味では当然なことなんですけれども、ともすれば、従来の科学技術の発展、或いは展開と言うものが人間性とか、集団の社会性そういうものをきちんと理解しない、それに基づかないで、いわば独走してきたという嫌いがあるのではないかと。ですから、その辺の理解をもう一度きちんとやりましょう。こういう話は難しい話なんですけれども、しかしその方向性としてですね、そういうことを十分今後、留意しなければいけないでしょう。そういうことから、効率性のほかに、快適性や調和性を実現するための科学技術の研究開発が今後ぜひ必要である、という主旨の答申が出されている。その辺について、もう詳しいことを申し上げる時間がないのですけれども、要するに、日本のこれからの科学技術の政策の一つの方向性を示すものであると言ってもいいと思うのです。私もたまたま、この答申が出される前に一年ほど、いろんな議論があった、そう言えば、専門委員会というのがございまして、そのメンバーでありましたので、そういう議論に加わったでございますが、この表現自身、またこの中の突っ込みが足りない、と私自身が思っているんですけれども、とにかく、そういう方向性で今後考えていきたいと思います、という一つの時代の合意であります。さらに今考えてみますと、現在我々がやる科学技術の研究なり開発なり、現在の我々の要求とか、欲求ということもありますけれども、実は考えてみると、将来の未来世代のそれらというものがどんなものかということをも十分本当は見通して、予測して、それに見合ったような研究開発をやるということが本当は必要なわけですけれども、それは実は大変難しいことであろうということで、なかなかそうまいことにはいかない。しかし、こういうことを考えてみますと、やはり科学技術の発展とその社会的インパクトということに付きまして、歴史的な考察をもう少し深めてみる必要はあるだろうと私自身は思うわけでありませう。

そういったことが私自身にとっての一つの動機でございまして、特にソフト系科学技術ということにつきまして、その後、せっかく答申を出したものですから、その見本になるようなプロジェクトをやってみたらどうだ、というような話がありまして、ある一つのプロジェクトをその後五年間、やってまいりました。そこで、やはり人間性の理解とか、大変難しいですけれども、その人間の要求に合うようないろんな科学技術ということを意識しながら、どういう研究課題がありうるかという風なことを、先ほど、司会の吉川先生も参加されたプロジェクトと一緒にやっていましたが、その中で、やはり豊かさというのがどんなもんだ、というような、表題としてよく出ているんですけれども、その中身はよく分からないながら、それについて、私は苦し紛れに、一つの作文をしたことがあります。

それでいいから、話をせよと言われ、それが今日の話の一つのきっかけでございます。

これから（資料4）の内容でだんだんいい加減な話に行くんですけども、物の豊かさと心の豊かさ。物は言うまでもなく人間の外部の世界の話でありますし、心というのは内部の世界でありますから、直結するはずはもちろん無いわけであります。しかし、相反することも決してないということで、座標軸で言いますと、縦と横といいですか、心の世界と物の世界、お互いに相関するところもありますし、矛盾するところもあります。その辺について、古来、哲学者なり、宗教家なり、いろんな人がいろんなことを考えて、また物を言ってきたわけであります。とにかく外部の世界と内部の世界の相互干渉ということが、これはやはり現実的には十分考えなければ行けないポイントだろうと思います。たまたま、ある所でお釈迦さんの話の本を読んでおまして、釈迦牟尼、要するにお釈迦さんです。ご承知の通り、迦牟尼の王族の家に生まれて、はじめに、物質的に非常に恵まれた環境に育って、結婚もして、子どもができて、どうもこのままじゃ物足りない。二十代の終わり頃に、出家をして、それから専ら修行に励む。当時もちろん仏教ができる前ですけども、非常に苦しい修行、自分の心身を痛めつけるような苦行をする人たちがたくさんいたので、その中に加わって、いろんな苦行を重ねたけれども、結局それだけじゃあかんと、単に苦しんでいるだけでは何もならない、ということで、悟りを開かれたですね。悟りを開いたのは三十代の終わりだったという話ですけども、その仏教の教えの深さというのは、私にはもちろん分かりません。一番最初の説教で、インドの話なんですけれども、どういふことを言われたかといいますと、その間の欲求を導くために快樂に耽る、功利に執着する、そういう生き方も、専ら苦行に夢中になって、精神的自由を得ようとすることも、共に愚かしいことであり、無益なことである。そういうことがお釈迦さんが最初に言われたお説教の中にあるようなんですね。もちろん私、梵語、サンスクリット語も読めませんので、間接の間接に、このようなことを聞いて、知っているだけの話なんですけど、仏教における一つの本質として「中道の教え」というのがあります。極端にあっちでもない、こっちでもない、それはそれで仏教の教えの一番神髄なんです。それじゃ、中を取って適当にやりましょうということなのかと、仏教というのはそういう気楽な宗教なのかというと、決してそうではない。私もよく分かりませんが。こういう物でも、こういう物でもない、その中でその中道を歩むというのは、一番難しいことなんだというのは本質なんだそうでございます。日本では、農耕文化の中で、みんなと一緒に仲良くやりましょう、そういう伝統文化、文明の中で、仏教がかなりふやけたもんになってしまった、ということは事実のようであります。その辺も、ある意味で大変面白い、日本の文明文化の特質を表す点があるわけあります。そんな話を長々するわけにはまいりませんので、これぐらいにいたします。しかしこの「中道の教え」というのは、私にとっても、ある意味で非常に、現代文明に対する一つのヒントではないかという気がするわけあります。その辺の深いところをもっと勉強して、いったいそれはなんなんだ、突き詰めないといけないのであり

ましようけれども、その辺の話はちょっと今日は省略させていただきます。これからもう少し現実的な話といいますが、先ほど申し上げました、物の豊かさと心の豊かさというのは二つのいわば直交する軸であり、決して物だけでもないということなのです。この（資料5）に示し、また先ほど申しましたソフト系科学技術のいろんなプロジェクトの中で、私なりに考えたり、ディスカッションしたりした中で、少し現実に結び付けて考えてみればどうということになるのか、ということです。空間的、時間的なゆとりと豊かさというものに大いに関係あるだろうということでもあります。つまり、生活とか、職場とか、交通などで、空間的な或いは時間的なゆとりと自由度が保障されている。よく言われますように日本の住居というのは世界的に見ても非常に狭い水準にあるわけですが、国土面積が小さいんだから、仕方がない、という見方もあります。けれども、必ずしもそうではなく、例えば韓国などと比べてみても、日本の住居というのは、一人当たり、或いは一家族当たり現実問題として非常にあると思います。例えば、その住居とか、職場つまりオフィスの面積が一定以上ある。オフィスの面積というのは、日本は非常に小さいです。例えば住居で、個室、それから、いわば家族の団欒の場、そういう物が備わっているという構造の住宅、例えばマンションでは、そういうところが十分確保されていない。そのことが、例えば子どもの教育といいますが、子どもが小さいときから大人と一緒に、或いは家族と一緒に、いろんな無意識のうちに、勉強するというのが、そういうことを妨げている面があるのではないか、という風に思えるわけでありまして。或いは自然と歴史伝統を利便性と調和させた町作りという風な、これは実は先ほど申しましたソフト系科学技術の中で、私自身が、一つの町作りの自律分散的な町作りの構想、これはまた大胆に提案といいますが、モデルを作ったりしたわけでございます。後でも申し上げますけれども、町といいますが、地域といいますが、或いはコミュニティーといいますが、そういう物がどうも日本の社会の中から、特に大都会の社会の中から消えてしまっている。それから、交通機関、これも、東京、大阪、京阪神、関東圏に住んでいる人は身に染みて感じているわけですが、大変なんだと。ですから、通勤通学にずいぶん時間を取られ、苦勞して、くたばり果てて、その結果、自分で自由に使える時間と申しますか、そういう物が非常に制約されている、圧迫されているという風なことがあります。それから、自由時間を有効に使える施設、設備が整っていない。これは最近では、いろんな文教施設、スポーツ関係の施設、或いは趣味と憩いの交換の場、そういった物が各地で整備されてきておりますが、地域に密着したものにまだまだなっていないというような状況ではないかと思えるわけでありまして。やはり今の日本の中で、そういう空間的な、或いは時間的なゆとりと申しますか、そういうものが、どうもかなり厳しく制約された状態にある。そこからまたいろんな問題が発生してきているのではないか、という風に受け取れるわけでありまして。

その次の項目として（資料6）のように、安全感、安心感というものがやはり豊かさにとって大事な要素ではないかと思えます。それは自然災害のみならず、人為災害に対する安全性、安定性、或いは安心感が保障されているということでもあります。それは一つのキ

一ファクターではないかという風に思えるわけでありませけれども、例えば日本でよく言われますように、自然災害や地震、津波、洪水に対する安全性。これは国の問題でもありますけれども、直接的には、やはり地域の問題であります。よくご承知の阪神大震災の時に、その辺で地域構造の脆弱さがいろんな形で現れてきたという現実があるわけでございます。それはいわゆるインフラ、ライフラインの脆弱さというだけじゃなくて、要するに顔の見えない社会構造になってしまっている。お互いに隣の人の顔が見えない社会構造になっているということを含めて、出てきたわけでありませ。それから、人為的災害、これは例えば犯罪に対する安全性でありますとか、資産の安全性、それに不動産、動産に対する保障、安全性といいますか、そういうものです。最近銀行はあてにならないよ、というようなことで、いろんな問題が発生しているようですが、そういう類の安全性やそれに関する安心感の保障や保険とか医療制度の問題などはこれから高齢化社会を迎えて、制度的、経済的な側面も含めて、問題になってきております。それからよく言われるバリアフリーということ。これも種々あると思いますが、よく言われるのは例えば身体障害者や高齢者、幼児、女性といった、女性が弱いかどうか、そういうことをいうと怒られるかもしれませんが、社会的な弱者に対する利便性、安全性をきちんと確保する、提供するということです。例えば介護やリハビリ器具を整理する。施設的なものを整備する。法律的な保障という風なことも、最近非常に日本でも、やかましく言われ出しておりますけれども、まだ今後の課題というのがたくさん残っているようでありませ。

それから、やはり技術的な問題があると思うのですが、つまり、科学技術がどんどん進歩しまして、設備とか、機械とか、器具とか、そういう物が非常に複雑になっている。或いは中身の見えないブラックボックスになってきている。それに起因して複雑な装置、器具類の問題、そういう物に対して、やはりきちんとした操作支援と申しますか、直接に例えば適切なヒューマンインタフェースとか、それから人的なエラーの防止策をハード、ソフトの面で開発して整備する、そういうこともますます重要性を増してきている。これは例えば航空機や原子炉であると、典型的に言われておるわけでありませ。吉川先生も、その辺を前から非常に重視して、いろんな研究、ヒューマンインタフェースの研究をされておられます。それから、先端技術などについて、どんどん技術革新が進みますと、必然的にその裏では未熟練者がどんどん増えてくるわけ。そういった人たちに、例えば、最近では、従来従事しておった仕事から離れて新しい職場環境に変わらざるを得ないというような人たちもどんどん出てきているわけ。そこで、そういう人たちに対する訓練機会というものをきちんと設定しなければいけないでしょう。より広く技術文明弱者に対する配慮といいますか、例えばパソコンとかそういう物が出て、私たちの世代と十代、或いは小学校世代と、どっちが強いかというと、若い人の方が遥かに強いわけ。どうも高齢者向きの配慮というものがあまりなされていないじゃないかと、感じる場合が多いわけ。そういう技術に関する広い意味での慣れ親しむ機会をきちんと作る、或いは弱者を作らないような配慮をした器具、設備を作ると言う風なことが、ますます今後重

要になってくると思います。それから、消費者の立場も、PL法、まあ、これは省きましょう。それから、快適な地域環境、地球環境でございます。そういった様々な側面での安全性といいますが、安定性といいますが、人間の心情的な安心感、それを保障しないと、どうも心の安定性といいますが、豊かさというものが阻害されるじゃないかと思えます。

それからもう一つ、(資料7)に示しますように多様性、公正感と豊かさということです。最近いろんな所で多様性が大事だと言われるようになってきました。日本はどうも homogeneous な社会であって、それは今の構造的な行き詰まりの一番の大きな原因になっているのだと思えます。もっと多様な人が一緒に活躍しなきゃいけないし、或いは教育の面でも、多様な人を、多様な人材を育てることがこれからの教育の眼目だろうと思えます。そういうことで、大変「なるほど」と思うわけですが、それ自身がなかなか難しい。つまり、日本の歴史的な伝統文化の中でそういう物が作られてこなかったということですので、急に言ってもなかなかできないと思えます。しかし、その辺は、これから十分考えなければならない点だと思えます。多様性ということともかなり密着して、公正さ、フェアネスということがどうしても必要だろう。最近、特にこの頃アメリカとか、その他の国から、いろんな点で制度、変革、規制緩和をしなきゃ日本だめよと言われているわけでありまして、また、国のいろんな権限を地方、地区に委譲するというようなことも言われているわけでありまして。それを突き詰めていきますと、市民権の保障と、裏腹に市民としての自覚、自律が要すると思っております。とにかく、そういう多様性、規制緩和、或いは自治とか、自律とかいう側面、これは実は一番難しいですし、ある意味で大事なんだろうな、という風に思うわけでありまして。ここで、平凡なことをいくつか挙げてありますけれども、消費生活における多様性の確保、どうもやはり流通の壁という目に見えない壁があちこちにあって、消費者としては情報がよく分からない。最もよく分からないなあと思われていたのは農業の問題であります。私なんか全く門外漢でありますけれども、よく考えてみたら、日本の農業というのは最も壮大な国家産業という形態をとっていると解釈した方が、いろんなことがわかりやすいですね。つまり、全て国策が支配している世界であります。最近、だいぶ壁が崩れてきたわけでありましてけれども、他の世界にも、大なり小なりそういうことがまだまだ残っていると思われるわけでありまして。そういう意味で、消費者に対して、透明な情報、国際的に透明な情報、というものを保障し、確保する必要があります。最近ご承知のインターネットの世界で、例えば、我々研究者が外国の本とか、雑誌を買うのはべらぼうに高いですね。本屋を通しますと、換算してみますと、一ドル三百六十円以上のレートで業者がやっているようです。そういう世界が現前としてあるのです。書籍販売の世界は最近インターネットを通じて、直接、例えばアメリカなら、アメリカの本屋に注文して、ドルでも払える世界になりましたから、航空便で本を送ってくれといって、その方がはるかに安い、ということが現実化してきました。そういうことで、情報通信システムというものが有効に作用して、そういうなんか訳の分からない壁というものが崩れつつあることは非常に結構なことだと思えますけれども、まだまだですね。そうで

ない世界があちこちにあるような気がいたします。そういうことになりますと、例えば、先ほどの業者の問題にしても、そういう消費の問題にしても、突き詰めてまいりますと、自分で選択するという自己選択。私はよく自律という言葉、自律分散システムということに引っかけて使うのですが、これは要するに自ら立つという意味ではなく、自ら律するという、オートノミということです。あれこれ語呂合わせみたいですけども、自由と規律という言葉は縮めた、これは単に語呂合わせの話なので、本当はそうではないですが。そうすると、やはりそれに直結して出てくるのは自己責任ということです。これは当然の話といえば論理的には当然の話ですが、現在の我が国では、必ずしも裏腹にはなっていない。自己選択はするけれども、自己責任は負わない、という風な、そういう構造がしばしば見られる。これは例えばエネルギーの供給の問題でも、そういうことが、何か大きな壁になっているような気がいたします。ですから、そういう多様性や公正さという風なものを今後育てていかないと、どうも日本は変な国だという、いろんなちぐはぐを続けることになるのではないかと思います。

そうしますと、やはりそういう慣習や伝統、文化というものは、一朝一夕に変わらないのは当然でありますけれども、やはり教育、学習の世界から、相当意識的にやっていかなきゃ、変わらないというか、変わりようがないじゃないか、という風に思うわけでありませぬ。教育や学習の世界で、多様性、自主性、個性などはよく言われていますが、具体的にどう実施して、どう評価したらいいのか、これはあまり実は進んでおりませぬ。私自身も、教育者を長いことやってきておりますので、熟知たるものがあるわけでありませぬが、今後一番大きな課題だと、少なくとも私の立場から言いますと、そんな気もいたします。最後に、ここに一行だけ付け加えたのは、ソフト系科学技術というのは何だかよく分からないというようなご質問がよく出てくるので、問題を逆手に取りまして、そういったような豊かさを実現する具体的な手段を提供する科学技術のことをいうんだ、という風に私がそのプロジェクトの最後の方で、理解されるかどうか分かりませぬけれども、締めくくりの言葉にしようかな、と思っているわけです。後もう時間がわずかですけども、少し付け出し的なことをさせていただきます。

自然の中の豊かさについてですが、(資料8)に示しますように自然対人間というのは非常に捉え方の難しい図式であります。今まで科学技術文明を開いてきた西洋には、その根底にある一つの思想があると思うのですけれども、それはギリシャ哲学、プラトン、キリスト教もちろんその前からあるわけでありませぬ。例えば、キリスト教の世界の中で、人間というのはあくまでも特別な生き物なのであると、つまり、人間というのは唯一、神様と似た形をした生き物でありまして、特別な知能といいますか、だから地上の管理を神から委ねられた存在なんだという、そういう伝統的な考え方があるのではないかと私は理解しております。それから、プラトンが「国家」という彼の代表的な著作がありますけれども、そこで政治の本髄は哲人政治、つまりエリート政治であるという思想です。これは大変また誤解を招いて、それが近世の優生学の思想とか、或いはナチズムに非常に影響を



与えたということで、非常に非難をする歴史家、思想家がおりますが、私はそうは思っておりません。しかし、そういう風に、人間というのが生物の中で特別な存在であり、また、人間の中には特別な人間がいるんだ、そういう思想が西洋文明の根底にあります。その辺から自然対人間という構図の中で、いわば人間は自然を支配し管理することになります。支配、管理といっても、いろいろなレベルがあるのでしょうけれども、勝手にやってもいいんだという風な所もあったのではないかと思います。しかし、これも簡単なことでありますけれども、自然の中で共生しなければ、食料とか、健康の維持とか、バクテリアや寄生虫なども、実は人間にとって大事だということです。最近花粉症が増えたり、アトピーが増えたりしたのは、人間のお腹の中から寄生虫が駆除されてしまったからだというような話があるようですが、私はその辺の話はよく分かりません。しかし確かに、例えば清潔、要するにそういうバクテリアとか、寄生虫とか、ウイルスとかがいない世界というのは、人間にとって甚だ健康上危険な状況なんだという話は確かのようにあります。先日も阪大の総長をしておられる岸本先生の話をお聞きしたら、アトピーなんか、その典型なんだという風な話もございました。どうしてもそういう泥臭い、ある意味では泥臭い自然の中から、人間というのが抜け出せないようになってきているのではないかと、いう風に思われます。そして、そんな難しいことを言わなくても、自然、緑の環境というものに対する我々の感性的、情緒的な憧れやその中で感じる安らぎは心の豊かさを生み出す土壌であり、自然と触れることが豊かというよりも、そこから豊かさが生まれてくる、そういう媒体なんだと、いう風に言えるのではないかと思うわけです。

その次に、(資料9)に示しますように、人間同士のふれあいということでもありますけれども、もう時間がありませんので、端折らせて頂きます。先ほどもちょっと申しましたけれども、最近の、特に中学生レベルの、或いは小学校でもそうですが、子どもがいろいろな社会的な問題を起こしているわけですね。その中で、子どもさんの社会性の欠如ということが、最近いろいろ、文部省も真剣に考えるなどと言っているのはもっともなことです。幼児期における子ども同士のふれあい、或いは子どもと大人のふれあいとかについてです。人間社会というのは、元々集団生活をしてきたわけですから、生まれた子ども、赤ん坊、大勢の人の中で、いろんな種類の人間と自然に付き合う機会があり、別にどうだこうだ、修身の教科書みたいなことを言わなくても、その中で人間の付き合い方、或いは集団の中での個人の振る舞い方などを自然に吸収して、社会性を養う基礎を作っていたのではないかと思うわけであります。そういう機会がだんだん減っているということ、これは非常に大きな問題ではないでしょうか。ですから、子どもとか、青少年の社会性が育たないとか、社会常識、マナーが欠如するとか、犯罪が増加する。一方から言えば、高齢者が高齢者で孤立するのは非常に困るわけであります。中村恵子先生はライフステージコミュニティというようなことをおっしゃっていますけれども、生命科学の立場から、幼いとか、働き盛りとか、或いは老いるとか、それはライフステージとして、生物として、全く自然なことなのであって、そういったいろんな人たちがコミュニティを作って、ふれあ

っていき、そういう生物としての集団というのが、もともと人間というものが生物としての自然の形なのである、とすることをよくおっしゃっています。そういう意味でのふれあいというものが、だんだんなくなりつつある、なくなってきた、という風に思えるわけです。その辺をなんとか、先ほどから申したような、ゆとりということにも関連して、取り戻さなければいけないじゃないかと思います。この間もある普通のアメリカ人とちょっと話をしまして、標準的なアメリカ人の生活というのは、自分の仕事と言いますか、その専門的なジョブと、それから趣味、それから地域活動、言うならば、ボランティア活動に大体三分の一ずつ時間を割いているそうです。どうも、この辺はだいが最近やかましく言われていますけれども、ボランティア活動、これもまた最近のカリフォルニアのサニール、例のシリコンバレーですね、あそこの話をちょっと聞いてまして、あそこは1991、2年ぐらいにすごくダウンしたことがあります。要するに、コミュニティとして、いろんな人の集積があまりにも急速であったために、インフラが追いつかないとか、或いは住居が足りないとか、物価が高騰するとかで一遍ダウンしました。これはえらいことだということで、地域の人たちが、自分たちでスマートバレーを作って、なんとか地域おこしをしようということで、最近非常な勢いでそこの地域に対する投資が増えてきているわけです。アメリカ中のいわゆるベンチャーキャピタルの23%があので地域に投資されているというようなデータがあるそうです。面積や人口から言えば、アメリカ百分の一、1%。そういう所にいろんな地域活動が行われております。その中で、地域の教育活動というのが非常に最近重視されているわけでありまして。そういう社会活動というのは、結局市民社会というものがどうも違うステージにあるようであると思われまして。日本はいろんなまた違う歴史がありますから、そう急にはならないし、なるのがいいのかわかりませんが、やはりその辺が、我々として考えなければいけない問題だろうと思います。心の豊かさというのは、自分が自律し得ていること、つまり自分が、いわば、オートノミを自分に対して持っているということと、そして他の人、社会に対して何らかの貢献をしていると言う実感が得られるときに、心の豊かさといいますが、幸せというのが得られるのではないかというのが私なりの一つの屁理屈的な結論です。

もう時間切れでありますので、最後に(資料11)に示しますが、これは下手なコピーでありますけれども、「豊かさは他から与えられるものでなく、自ら作り出すものである。」これはどこかで聞いた文句と思われるかもしれませんが。新幹線に乗っていると、テロップで「健康は他から与えられるものでなく、自ら作り出すものである」、なんかそういう文句がよく出てきます。あれのコピーのコピーであります。もう少し付け足してお話しようかと思っていたこともございますけれども、時間がちょうどでございますので、なんか訳の分かったような、分からないように、終わったと、ということで、申し訳ございませんが、終わらせていただきます。どうもありがとうございました。

